

## 38.5 未開拓の沃野へ

私の専門はシミュレーションでも情報科学でもありません。その私が、なぜ(素人のくせに)人工社会の開発に関わったのか。それは、一言で言えば、この新しい方法に魅せられたからです。自分の携わってきた学問にとって人工社会はきわめて重要な役割を果たすと確信しました。しかし、私にはマルチエージェント・シミュレーションのプログラムを作る能力がありません。私にも使えるシミュレータが欲しいという願いがartisocの登場で実現しました。これからは、artisocを自分の専門分野で使っていく段階です。

それでは、なぜ人工社会の技法に関する本を書いたのか(余計なことをせずに自分の専門分野で応用すればよいのではないか)。それは、さまざまな分野で人工社会の技法を試してもらいたいからです。多くの分野への応用は、私には不可能です。この新しい方法に関心を持っている人に語りかけること、人工社会に対する人々の関心を高めること、がせいぜい私にできることです。

これからは読者の皆さんの出番です。それぞれの関心に従って、人工社会の可能性を追求して行って下さい。

人工社会の技法が、artisocの使いやすさも手伝って、多くの分野に浸透していくことを願っています。また、既にマルチエージェント・シミュレーションが市民権を得ている理工系の分野でも、artisocの使いやすさが学問の発展に少しでも貢献するなら望外の喜びです。